

される問題である。脳性麻痺児の興味と関心は身近な出来事に限定されているようだ。日常生活動作は幼児期にひきつづき大切な訓練となる。日常生活動作の達成に関する学年別比較をみると、電話やスイッチの操作がすでに入学当初からよくできているにもかかわらず、学習に要する道具の使用や学習能力はかなり劣っている。しかしいずれも学年を経るにしたがって大部分の生徒が達成できる傾向にあると推測される。学校での様々な経験が身辺動作を確立し、さらに積極的な表現活動に進歩を促すものと思われる。作業療法はこのような条件の中で教育や他の訓練と協調しながらさらに集中的に自立への方向づけを助長する。

8. 学習理論に基づく日常生活動作訓練

最初は目的とする動作要素を簡単な別の遊び道具に代えて練習させる。これによって更衣、食事、用便のために必要とする体の使いこなしを感じとらせる。次第に視覚→触覚→筋固有感覚→聴覚の順に素材を替えて段階的に実際の目的動作に近づけてゆく。形、大きさ、色、質などの変化が子供を自然に興味深く身辺動作の自立に導くのである。坐位の安定と介助に対する協調的な動きが日常生活動作を積極的にすすめる必要条件である。身体像、左右前後の知覚、空間と位置の感覚などの発達がこの訓練を通じて学習できるようにもする。このような基礎能力が手の操作の熟達に結びついてゆくと予測されている。抽象的な道具を使って手の技巧動作の発達を求めると、自分で自分のことをする日常生活動作を通じて手の機能や姿勢の調整を学ばせる方が練習の効果で優れているといわれている。

9. 手の技巧的操作の習得のための準備

成人が固有の動作様式で作業に適合してしまうことから考え、幼児期での manipulation skill の発達が重要な課題となってくる。この能力の基礎となる幼児期での視覚、触覚、触運動覚の経験が能動的または被動的に繰返されることによって集中的に与えられなければならない。また注意をひきつける、注意を持続させるなどの外部からの刺激効果に充分配慮と試みがなされなければならない。これらの機能が脳性麻痺児の将来の能力に重要な影響を及ぼすと考えられるからである。

脳性麻痺の治療

言語治療

お茶の水女子大学児童学科教授

田口 恒夫

概要

言語障害の診断と治療に関する従来の考え方の概要とその思想を紹介し、ついで、言語の発達や向上および知的好奇心や対人的積極性などの発達の土壌として、乳児期の母子愛着関係の上に立った情緒の安定が不可欠の条件であることを強調し、それに関連した、サルワットの隔離飼育実験に関する Harlow の 16 ミリフィルムを供覧した。

脳性麻痺児の言語障害について、その症状、各種タイプの特徴、障害の発生機序、診断の方針と方法、現行の治療方針と方法の概要を述べ、今後の言語リハビリテーションの仕事を考える場合の課題についてふれた。

I. 言語障害と言語治療

1. 子どもの言語障害の分類

現在表 1 のように分類されるのが慣例であり、出現率は約 5～10% とされている。脳性麻痺では 75% 前後という報告が多い。

2. “問題”の成立

言語障害が問題として成立するためには 3 つの要素があることが必要であり、Johnson はこれを図 1 のように立体の体積として図示している。“障害”と呼ばれるものについては、“疾病”と異なり x 軸が 0 になる可能性がほとんどないというのがその特徴である。

3. ハンディキャップとしての言語障害

Van Riper は言語障害が本人に与える影響を表 2 の pfagh の 5 つの要素をとりあげて説明している。

4. 言語臨床家の資格と養成課程

アメリカでは表 3 のようなカリキュラムに従って表 4 のような規模で専門職の養成を行っている。

5. 診断と治療

従来、ことばという行動の問題に対して、身体的欠陥ないし疾病に取り組んできた臨床医学の手法にならった診断法が用いられ、重いものに対しては治療として“訓練”ないし“教えること”によってこれを軽くしようとする試みがなされてきた。

6. 言語機能と言語発達の特徴

近年ようやく言語機能の特徴とその発達に関するメカニズムについての理解が深まり、問題の考え方や扱い方

表 1 (田口) 子どもの言語障害の分類 (約5%)

1. 言語発達の遅れ
2. 構音障害
3. どもり
4. 声の障害
5. 口蓋裂に伴う言語障害
6. 脳性麻痺に伴う言語障害
7. 聴力障害に伴う言語障害

表 2 (田口) 言語障害が本人に及ぼす影響
"pfagh" (C. Van Riper)

P : Penalty	罰, 反則
F : Frustration	挫折感
A : Anxiety	不安
G : Guilty Feeling	罪意識——非社会性
H : Hostility	敵意——反社会性

表 3 (田口) 履習課程

1. 基礎分野
(1) 医学 (解剖, 生理, 神経)
(2) 音声学
(3) 言語科学 (意味論, 言語心理, コミュニケーション理論)
2. 専門 (言語)
構音障害, どもり, 失語症ほか
3. 専門 (聴能)
4. その他
児童心理, 精神衛生ほか
5. 臨床実習
6. 修士課程修了
7. 臨床経験 (インターン)
8. 学会による統一試験

表 4 (田口) 言語治療専門職の養成 (アメリカ)

1. 大学の数

	学部	修士	博士	計
1960	63	90	40	193
1971	81	148	60	289

2. 卒業生の数

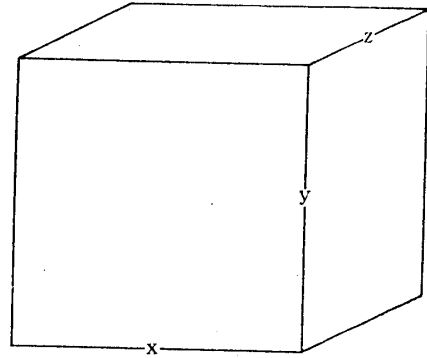
	学部	修士	博士	計
1960	1662	502	95	2259
1972	4993	2667	212	7872

にも大きな変化が起こりつつある。

7. 乳児期の母子関係と対人的行動の発達

出生時からの図2のような母子間の相互的・循環的・らせん的やりとり体験を通して, 図3のような条件のもとに, 各種の能力がひとりでに芽ばえてくるものである

1976年1月



x: ことばの特徴 (ことばの障害の重障度)
y: xに対する周囲の人の反応
z: x, yに対する本人の反応

図 1 (田口) “問題”としての言語障害の成立 (Wendell Johnson)

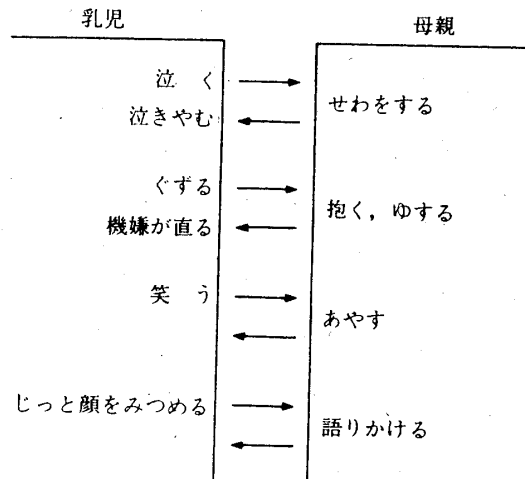


図 2 (田口) 乳児期の母子のやりとり

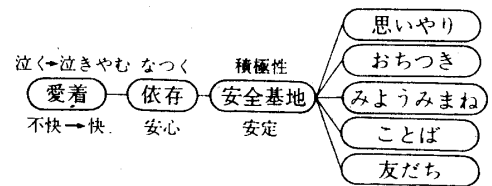


図 3 (田口) 母子関係とパーソナリティの発達

ことが次第に明らかになってきた。

8. サルの実験

近年これを裏づける事実が臨床的にも動物実験からも次第に多くなってきている。たとえばサルを隔離飼育すると(1)行動異常(うずくまり, 自傷, 常動行動など), (2)感情表現の欠除, (3)友だち遊び不能, (4)日常生活動作習得困難による事故死, (5)群への不適応, (6)性行動の欠陥, (7)育児行動の欠除などが例外なくみられることがわかっている。

臨床的にも乳児期から(1)泣かない, (2)あやしても

笑わない、(3)視線が合わない、(4)呼んでもふり向かない、(5)抱きぐせや添い寝の習慣がつかない、(6)“芸”をしない、(7)指さしをしないなどの特徴がある子どもが多く、これに対して母親との間の愛着依存関係の確立充実を試みると、それまで教えても効果の上らなかった子どもがしばしば急速な進歩を示すことが知られている。

II. 脳性麻痺の言語障害

1. 症状

症状としては、(1)ことばの発達の遅れ、(2)声の異常、(3)構音の異常、(4)リズムの障害、(5)話すことに対する態度の異常、(6)聞きやすさと明瞭度などがある。

2. 言語障害の発生機序

もともと運動機能障害(呼吸発声調節能力の障害、構音器官の運動機能障害)などがあるうえに生育歴上各種の学習条件の不備が重なり、そのうえにしばしば聴覚障害とくにアテトーゼ型に多くみられる核黄疸による高音閾難聴、知能低下、脳損傷などの身体的悪条件があり、それらに伴って乳児期からの母子関係の成立、発展、对人的行動の発達異常などが加わり、それらが複合して言語の発達過程を歪ませているものと考えられる。

3. 言語障害の診断と治療

心身および言語についての発達歴と現症に関する情報を分析し、問題の性質と向上の可能性についての臨床的判断に基づいて指導の計画を立て、試行しながら改訂していく。

治療には(1)言語発達の促進(ことばの衛生指導)、(2)呼吸・発声機能・構音器官などについての身体的レディネスの向上、(3)発声指導、(4)構音指導、(5)リズム異常の指導、(6)随伴運動対策、(7)難聴対策などが含まれる。

III. 課題

リハビリテーションの名のもとにx軸を短くすることに腐心し、かえってy軸・z軸をのばすような誤りをおかすことのない体制が必要である。また言語などの社会的行動については乳児期からの人間関係の発達を保障するプログラムが用意されるべきである。

参考資料と文献

A. 母親のためのパンフレット

- 1) 日本肢体不自由児協会発行：「ことばの指導」(改)，1975.
- 2) 全国言語障害児をもつ親の会発行：「ことばの遅れた子の育て方」(緑)，1975.

- 3) 「母親への手紙」(白)，田口編，言語発達の臨床，pp. 188-198，光生館，1974.
- 4) 全国言語障害児をもつ親の会発行：「話せない子一質問と答」(オレンジ)，1975.
- 5) 全国言語障害児をもつ親の会発行：「話せない子一質問と答一第二集」(ピンク)，1975.

B. 乳児期の母子関係

- 1) 小嶋謙四郎：乳児期の母子関係一臨床心理学的接近一，医学書院，1968.
- 2) 小嶋謙四郎：発達臨床心理学，朝倉書店，1972.
- 3) 幸田敦子：「言語発達と乳児期の母子関係」ほか，言語発達の臨床3章，光生館，1974.

C. サルの実験

- 1) H. F. ハーロー・他：「子ザルの異常な社会的行動」，J. ヘルムート編，岩本憲監訳，「障害乳幼児の発達研究」黎明書房，1975，第21章.
- 2) H. F. ハーロー，Mother Love：CBS. TV，16 mm/film “Conquest”
- 3) 糸魚川直祐：サルの異常行動，雑誌「モンキー」，126. pp. 26~29. 1972.
- 4) H. F. ハーロー，太田次郎監訳：子ザルの愛情，日本経済新聞社，1970.

D. 動物行動学

- 1) N. テインバーゲン，富岡千代，田口恒夫訳：動物習性学から見た自閉症，言語障害研究，82-83 合併号，pp. 8~20，1975.
- 2) E.A. テインバーゲン・N. テインバーゲン，田口訳編：小児自閉症一動物行動学的アプローチ，一新書館，近刊予定.
- 3) N. テインバーゲン，渡辺ほか訳：動物のことば一動物の社会的行動一，みすず書房，1955.
- 4) N. テインバーゲン，安部ほか訳：セグロカモメの世界，世界動物記シリーズ⑩，思索社，1975.